熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2024.1.22
第 225号
発行 入試・広報課

充実の認定看護師教育課程

脳卒中看護分野 認知症看護分野 念願の同時開講へ

2024年度入試、全国から受験者

キャリア教育研修センターの入学試験合格者が決まり16日（火）、発表されました。合格者は認定看護師教育課程脳卒中看護分野６人、同課程認知症看護分野12人、特定行為研修課程２人の計20人です。認定看護教育課程の脳卒中看護分野と認知症看護分野の入試が同じ年度に行われるのは初めてです。これで、2024年度からは念願だった両分野の同時開講が実現します。

本学は、日本で唯一の脳卒中看護分野と、九州で初となる認知症看護分野の教育課程を持ちながら、指導者の確保が難しいことなどから、これまで隔年で開講を余儀なくされていました。昨年５月に福岡脳神経外科病院（福岡市南区）と脳卒中看護分野の認定看護師教育の充実に向けた包括連携協定を締結。同病院を“福岡キャンパス”と位置づけ、同病院所属の認定看護師が教員となり、現地で脳卒中看護分野のカリキュラムの主要部分となる対面授業や臨地実習を担うことになりました。これにより、2024年度からは脳卒中看護分野と認知症看護分野を毎年開講できるようになりました。

入学試験は６日（土）に本学で実施され、全国各地から定員を大きく超える受験者が筆記試験と面接試験に臨みました。各課程の合格者は１年間、遠隔授業を含む講義や臨地実習に臨みます。

キャリア教育研修センター認定看護師教育課程長の飯山有紀准教授は「脳卒中看護分野は本学のみで開講しており、関東、関西、東北、中国地方からも受験がありました。地域や分野を超えた交流が、深い学びにつながることを期待しています」と話していました。

（入試・広報課）

アカデミックスキル支援センター
レポート

「ケア」巡り堂々のプレゼン

アカデミックスキルⅡ発表会 リーダー学生が司会進行

「ケア」をテーマとした１年次生によるプレゼンテーション発表会が11日（木）と18日（木）の２日間、50周年記念館などであり、学生たちは個々に作成したオリジナルのスライドを使いながら、「ケアとは、『される側』だけでなく『する側』も成長させるもの」などの解釈を次々と披露しました。

文献講読とライティング、プレゼンテーションを連動させた「アカデミックスキルⅡ」授業の一環。授業は、メイヤロフ著『ケアの本質』を主要文献とし、「ケアとは何か」という課題を考える形で進めてきました。４～５人編成のグループでディスカッションを重ね、既にグループごとに２千字程度のレポートを作成。プレゼンテーションは、グループでの成果物を基に個々の学生がスライドを作り、内容を２分間にまとめたものです。

学科ごとに行われた発表会は、いずれも50周年記念館と3110M講義室の２会場に分かれ、２週にわたって実施。各学科のリーダー学生が司会進行役を務めました。何度も練習を重ねたという学生もいて、原稿に頼らずに張りのある声で発表する姿が多くみられました。また、自身が目指す専門分野と絡めた内容の発表も多く、ケアに対する学生たちの関心の高さをうかがわせていました。

3110M講義室で発表するリハビリテーション学科の学生

担当の渡邊淳子教授は「ほとんどの受講生が原稿を持たずに発表できていたクラスもあれば、原稿やスライドの文章を読んでしまう傾向にあるクラスもありました。クラスのムードが課題の完成度に関わっているように感じています。来年度のスキルⅠ・Ⅱの授業では、さらにクラス全体で専心できるような授業設計を考えます」と話していました。

（アカデミックスキル支援センター）

活動報告

言語発達臨床研究室（ことばの相談室）

第２回西里小交流会　情報共有し直接支援も

言語発達臨床教育研究室（ことばの相談室）は12月19日（火）、西里小学校で第２回交流会を開催しました。今回は、教員４人（ST専攻：井﨑・永友・松尾、OT専攻：仙波）が訪問し、各クラスの授業の様子を見学しました。放課後には各クラス担任の先生と情報を交換し、共有しました。

今回は、事前に各担任の先生に児童の学校生活での困り感を、ことばの相談室が作成した専用記録シートに記入してもらい、記載内容に沿って授業見学や情報交換を行いました。日頃の先生方の学校生活での困り感を聞き、直接、児童の授業の様子を見せてもらう中で、より具体的な内容の情報共有ができたと思います。

その後、「ことばの相談室」には保護者からの相談の連絡もあり、直接的な支援へとつながっています。今後も、継続的に交流を行いながら、地域の児童や保護者だけではなく、先生方への支援も行っていければと考えています。（ことばの相談室）

担任の先生と情報交換を行う仙波准教授（中央）と永友講師（右）

看護学科３年「健康教育論」　親子４組交え母子領域の学外演習

参加した親子とリトミックに取り組む学生たち

看護学科３年生の必修科目「健康教育論」の学外演習（母子領域）が12月19日（火）、3320演習室であり、４組の親子（０～１歳）９人を交えて学習の成果を披露しました。

同講義では、ヘルスプロモーションとの関連で健康教育を理解し、その意義や特性、方法について学習し、学内演習や学外演習の健康教育実践を通し一連の基本技術を習得していきます。参加した親子は、北区のごちょう子育て支援センターの呼びかけに応じて来学しました。

この日は、母子領域の学生14人が２つのグループに分かれ、「発達と外遊びの関わりについて」、「リトミックをやってみよう」と題した発表等を行いました。参加した親子のアンケートには「外遊びの大切さを感じた」「リトミックは自宅でもやってみたい」といった回答が寄せられました。

（入試・広報課）

私の秘話ヒストリー

酒と煙草と家族と仕事

リハビリテーション学科
理学療法学専攻
嶋村剛史・教務嘱託

節度のある適度な飲酒は健康に良いといわれており、週末に家族でテーブルを囲み、妻と晩酌をすることが唯一の楽しみでした。

しかし、LancetやJAMAの報告で、飲酒量は少ない方が良い、健康への影響を小さくするには飲酒量ゼロが良いとされています。私の人生において重きをおいてきたのは「バランス」を取ることなのですが、ゼロといわれては調整ができません。タバコが悪役になっている世の中ですが、少しずつアルコールにも目が向いてきています。海外では色々と規制されているそうですので、酒好きにとって日本はまだまだ生きやすいですね。

妻はアルコールを奨めてくれますが、愛情と殺意は紙一重。息子には「なんでお酒を飲むの？」と聞かれて返す言葉がありません。学会の質疑応答より手厳しいですね。秘話には程遠い内容になりましたが、ストレスは発散、飲酒量はゼロへ収束するような軸をもって仕事に取り組んでいきたいと思います。

晴れやか 永年勤続の21人を表彰

12月27日（水）に開かれた2023年仕事納め式の席上、永年勤続者が表彰されました。被表彰者は次の通りです。（敬称略）

▽30年　野中喜久（医学検査学科）

▽20年　楢原真二、安楽健作、永田和美（以上医学検査学科）、多久島寛孝、徳永郁子（以上看護学科）、向井良人、山鹿敏臣（以上共通教育センター）、竹熊千晶（保健科学研究科）、勝木康子（大学事務局）、小村泰助、船津佳奈（以上学務課）、井坂史絵（入試・広報課）、上野洋子（IR・情報システム室）

▽10年　正木孝幸、矢野正人、坂本亜里紗（以上医学検査学科）、土井篤（理学療法学専攻）、渡邉敏之（生活機能療法学専攻）、池嵜寛人（言語聴覚学専攻）、島本光裕（IR・情報システム室）

仕事納め式の席上、紹介される永年勤続の皆さん